

宮崎公立大学「ボランティア論」の評価に関する研究

Research on Evaluation of “Volunteer Work Practicum” of Miyazaki Municipal University

川 瀬 隆 千

本論は、宮崎公立大学におけるキャリア教育プログラムの一科目として2005年度から開講された「ボランティア論」について評価するものである。

「ボランティア論」の目的は「現代社会のさまざまな課題に触れることを通して、視野を広げ、社会の一員であることを自覚するとともに、大学での勉強の目的を見つけること」であり、この目的を達成するため、COCOMOシステムを導入して、ボランティア情報を提供したり、サービス・ラーニングの教育理念と方法を取り入れて、担当教員が積極的に学生の活動に関与し、助言を与えたりしてきた。その結果、1学年の25%にあたる学生が地域でのボランティア活動に従事した。また、受講生は、ボランティア活動を通して、社会の問題や課題に対して関心を持ち、積極的に取り組みたいと考えるようになっていた。しかし、サービス・ラーニングに結びつくような活動を行った学生は必ずしも多くなく、また、「ボランティア論」の受講は、大学での学びへの関心に結びついてはいなかった。

今後は、学生のボランティア活動への関心、社会問題への関心を具体的な行動につなげるための方策を検討し、ボランティアに関する情報提供の方法や、学生の活動報告へのコメントなどを工夫して、学生が大学での学びとボランティア活動とを結びつけるように働きかける必要がある。

ボランティア活動を経験しながら、社会の課題に触れ、大学での勉強の目的を見つけることのできる機会は貴重であり、キャリア教育プログラムとしての「ボランティア論」は現在のような形で継続されることが望ましい。その一方で、本格的にサービス・ラーニングを導入するには、専門演習の学習方法の一部として取り入れることを検討するべきであろう。

キーワード：ボランティア論、プログラム評価、サービス・ラーニング、キャリア教育

目 次

- I 問題提起
- II 「ボランティア論」の目的
- III 「ボランティア論」の方法

1 COCOMOシステム

IV 2005年度宮崎公立大学「ボランティア論」の評価

- 1 評価の目的と方法
- 2 「ボランティア論」に対するニーズに関する評価
- 3 「ボランティア論」の目的に関する評価
- 4 「ボランティア論」の方法に関する評価
- 5 「ボランティア論」の成果に関する評価

V まとめにかえて：「ボランティア論」の展開

VI 引用文献

I 問題提起

宮崎公立大学（以下、本学という）人文学部では2004年度からの新しいカリキュラムにキャリア教育科目群を導入し、「キャリア設計」、「ボランティア論（実習含む）」、「インターンシップ論」、「社会人実践教養」の4科目をおいた。このうち、「キャリア設計」と「ボランティア論（実習含む）」は、2005年度から、「インターンシップ論」と「社会人実践教養」は2006年度から順次開講されている（インターンシップは従来から行われてきたが、キャリア教育プログラムの導入に当たり、「インターンシップ論」としてキャリア教育科目の中に組み込んだ）。本研究は、この4科目のうち、「ボランティア論」についての評価を行うものである。

本学がキャリア教育科目群を導入したのは、学生一人一人の自己理解を促進し、進路探索の機会を与え、長期的な視点で進路を設計し、適切な進路を主体的に決定できるよう支援するためである。「ボランティア論」をキャリア教育科目の中に位置づけたのは、ボランティア活動を通して実社会の課題に触れることが、学生の視野を広げ、地域社会の構成員としての自覚を持たせると同時に、学生の学ぶ意欲を向上させ、進路設計にも肯定的な影響を与えると考えたからである。

2002（平成14）年7月の中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」では、「特に、学生にとっては、（ボランティア活動によって）何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる。」と述べている。「ボランティア論」導入はこのような答申にも沿うものである。

しかし、学生の自主的な行動にだけ任せていても教育的な効果はあまり期待できない。なぜなら、学生にとっては、ボランティア活動を通して経験したことを専門的な知識と結び付けて考えたり、専門的な知識を使ってボランティア活動の現場で生じていることを整理して理解したりする機会が乏しいからである。したがって、学生に対する教育的な関わりを組織的に展開して、ボランティア活動と大学での勉学を積極的に結び付けて考える機会を提供する必要があると思われる。

そのため、本学の「ボランティア論」は実習を含む科目として設置され、当初からサービス・ラーニングの教育理念を取り入れてきた。サービス・ラーニングは、見返りを求めない伝統的なボランティア活動の概念に基づくものの、強いて言えば「学習」を見返りとして、ボランティア・サービスを提供する学生側とそれを受ける側とが対等の互酬関係に立ち、学生がボランティア活動の経験を授業内容に連結させ、学習効果を高めるとともに、責任ある社会人を育てることを目的とする（佐々木，2001、水上，2003）ものである。

サービス・ラーニングは従来のボランティア活動のように、提供する側の一方的な奉仕活動（サービス）だけではなく、奉仕活動を通してそれを受ける側から、または活動自体から学ぶ（ラーニング）という双方向的要素が大きな特徴である。人々のためではなく、人々と一緒に行うものと言える。

ところで、一般に、既存のプログラムが望ましい結果を達成できていない、あるいは、既存のプログラムが非効率的であるなどの問題が発生すると、既存のプログラムを修正したり、新しいプログラムを導入したりする必要が生じる。そのような場合、プログラム管理者などは、「そのプログラムの目的や方法が適切であるか」、「そのプログラムによって得られた結果は目的を達成しているか」、「そのプログラムは効率的に運用されているか」などの問いに答えなければならない。プログラムの評価とは、これらの問いに答えることである（ロッシ・リップセイ・フリーマン，2005）。

本論の目的は、「ボランティア論」という新しいプログラムの1年目の成果について評価を行い、今後のより望ましい「ボランティア論」に向けて、情報を得ることである。特にここでは、「ボランティア論」の目標とデザイン、実施方法、及び、その成果について評価する。

「ボランティア論」はキャリア教育プログラムを構成する科目であるので、その目標と成果については、キャリア教育との関連で評価されることになる。また、「ボランティア論」の方法はサービス・ラーニングに基づいているので、そのデザインや実施方法については、サービス・ラーニングとの関連で評価される。

II 「ボランティア論」の目的

本学の「ボランティア論」はキャリア教育プログラムの中に位置づけられている。キャリア教育プログラムの目的は、「学生一人一人の自己理解を促進し、進路探索の機会を与え、長期的な視点で進路を設計し、適切な進路を主体的に決定できるよう支援すること」であり、特に、「ボランティア論」においては、「現代社会のさまざまな課題に触れることを通して、視野を広げ、社会の一員であることを自覚するとともに、大学での勉強の目的を見つけること」を目的としている。受講生は「ボランティア論」の講義と実習を通して、①社会の課題に触れ、②視野を広げ、③社会の一員としての自覚を持ち、④大学での勉強の目的を見つけることが期待されているので

ある。また、シラバス等には触れられていないが、「ボランティア論」開設の目的には、⑤地域との連携を促進することも含まれている。

Ⅲ 「ボランティア論」の方法

「ボランティア論」の実施にあたって、本学ではサービス・ラーニングの教育理念と方法を取り入れた。その理念については、先に述べたとおりであるが、その方法は、佐々木（2001）によれば、以下のようなものである。

- 1) 学生は研究課題についての知識面と実践面の講義を受講し、学習プロジェクトの内容についての知識を得た上で、実践に備えて計画準備を行う。また、ボランティア活動の意義や心構えに関する講義を受ける。
- 2) 学生はフィールドでボランティア活動を体験する（30時間程度）。
- 3) 学生はフィールドで得た体験を批判的に考察するため、ボランティア体験を詳細に記述した上で、それを授業科目の内容と理論的に関連付けて分析し、レポートにまとめて発表する。
- 4) 担当教員は各学生の体験したボランティア活動の内容と授業内容とを連結させて総括する。学生はそれをもとに新たな知見を得て、小論文にまとめ提出する。

このように、学生は大学で理論を学び、フィールドでボランティア活動を体験する。担当教員は、学生のこの2つの経験の間に積極的に関与し、学生が両者を結びつけて考察し、新たな知見を得ることができるように助言する。このような教員による積極的関与・助言がサービス・ラーニングの大きな特徴である。

一方、本学における「ボランティア論」の12回の講義内容は、表1に示すようなものであった。

表1 「ボランティア論」のシラバス（概略）

第1回	オリエンテーション	「ボランティア論」のねらいについて説明
第2回	現代社会のさまざまな問題とボランティア活動（1）	現場からの報告
第3回	現代社会のさまざまな問題とボランティア活動（2）	現場からの報告
第4回	現代社会のさまざまな問題とボランティア活動（3）	現場からの報告
第5回	活動計画の作成	毎回の活動報告の方法と活動時の心構え
第6回		
第7回	ボランティア活動	
第8回		
第9回	中間報告	中間報告と今後の展望
第10回	ボランティア活動	
第11回		
第12回	報告会	活動内容と発見の報告

第1回は、担当教員によるオリエンテーションを行い、ボランティアの概念、「ボランティア論」の方法について説明した。第2回から第4回では、学外からゲスト（講師）を招いてボランティア活動の現場からの報告をしていただいた。2005年度の場合は、市民活動の推進に関わる行政担当者、社会福祉に関わるNPO法人の理事長、子育て支援などに関わるNPO法人理事長の3名であった。

その後、第5回では、毎回の活動報告の方法やボランティア活動時の心構えについて説明した。特に、活動の度に、活動日時、活動場所、活動内容や発見・感想をブログに投稿するように伝えた。

実習には講義5コマ分を割り当て、30時間以上の活動を行うように指示した。その際、実習30時間の中には、実際の活動だけでなく、活動のための事前研修や説明会、事後研修や反省会も含まれることを説明した。受講生は以下に示すCOCOMOシステムの情報などを参考に、各自で実習先を見つけ、実習を行った。また、上で述べたように活動報告をブログに投稿した。投稿された報告に対して、担当教員がコメントをつけた。

第9回は中間報告会に当てられた。これまでの活動を振り返り、受講生同士で情報交換をした上で、担当教員の指導の下、今後の活動を展望した。最終回の報告会では、活動を振り返り、担当教員の指導の下、活動を通して発見したことについて意見交換を行った。

最終回の時点では30時間の実習を終えていない学生もいたため、実習の終了日を2月末とした。その後、「実習の具体的な内容」、「実習を行う際の問題意識や期待」、「実習を通して考えたこと、発見したこと、反省点や改善点」、および、「発見を今後の学生生活にどのように生かすか」の4点を内容とするレポートを提出させた。

1 COCOMOシステム

COCOMO (COmmunication for COmmunity service learning MOdel) システムとは、地域のニーズを収集、発信し、地域と学生・大学を結ぶICTを利用したシステムのことである（辻・川瀬・竹野・田中，2005）。本学「ボランティア論」の特徴は、このCOCOMOシステムを利用して、受講生にボランティア情報を発信するとともに、学生の活動報告やそれに対する担当教員のコメントなどを、学内のみならず、地域にも発信したことである。現時点では十分に機能していない部分もあるが、COCOMOシステムを利用して、大学・学生と地域の市民活動団体との相互評価を行うことにより、地域の教育力を活かしたサービス・ラーニングを実施することができる。同時に、地域の市民活動の活性化にもつながることが期待される。

IV 2005年度宮崎公立大学「ボランティア論」の評価

1 評価の目的と方法

「ボランティア論」は始まったばかりの新しいプログラムである。したがって、その評価はプログラムの改良に有効な情報を得るために行われるのが望ましい。このようないわゆる「形成的評価」を行うことが本研究の第1の目的である。また、「ボランティア論」という新たなプログラムの導入が学生のキャリア意識や社会意識の向上に及ぼす効果に関する一般的な知見を得ることも必要である。本研究の第2の目的はこのような「知識形成」に有効な情報を収集し、それを適切に分析して、広く発信することである（ロッシ他, 2005）。

ところで、プログラムの改良を目指して、改良に有効な情報を得るためには、プログラムに対するニーズや、プログラムの目的、実施方法、成果、効率性などに関する情報が必要となる（ロッシ他, 2005）。

「ボランティア論」に対するニーズについては、組織的な調査などは行われていない。しかし、学生のボランティア活動に対する意識調査が行われているので、それらの情報を参考に、ニーズに関する評価結果を示すことができる。「ボランティア論」の目的については、まず、ボランティア活動の最大の特徴である「自発性」をキーワードに検討し、その上で、キャリア教育との関連について議論する。また、「ボランティア論」の方法については、主にサービス・ラーニングとの関連で述べることにする。これらの評価にあたっては、12回の講義終了時に行われた授業評価アンケートの結果を参考にしたい。授業評価アンケートの項目と結果については表2に示す。「ボランティア論」の成果については、COCOMOシステムを利用して収集した学生の活動時間、活動場所の記録、授業評価アンケートの結果を参考に検討する。ただし、ここでは「ボランティア論」の効率性に関する評価は行わない。効率性に関する調査が行われておらず、また、担当者のレベルでは客観的な評価を行うことが難しいからである。この点については今後の検討課題である。

2 「ボランティア論」に対するニーズに関する評価

先に述べたように、「ボランティア論」に対するニーズ調査は行われていないが、学生のボランティア活動に関する従来調査結果をまとめると、学生の多くはボランティア活動のきっかけ、ボランティアに関する情報を求めていることが分かる。

たとえば、辻・川瀬・竹野・田中（2005）は、本学1年生207名を対象に行われたボランティア活動に関する調査について言及し、約4割の学生が「ボランティア活動に参加したい」と回答する一方で、「参加したくない」、「分からない」と言う回答も半数であったことを報告している。そして、ボランティア活動に参加しない理由として、学生の知識不足をあげている。学生がボランティア活動に参加しないのは、「自分に何ができるのかわからない」というような理由が多いのである。

宮崎公立大学「ボランティア論」の評価に関する研究（川瀬隆千）

表2 授業評価アンケートの項目と結果^{*1}

質 問 項 目	選 択 肢(%)					
	1	2	3	4	5	平均
1. NPO, NGO やその他のボランティア活動について簡単な説明ができるようになった	8.5	36.2	46.8	4.3	4.3	2.6
2. ボランティア活動の基本的なことについて他の人に説明できるようになった	0	12.8	38.3	40.4	8.5	3.45
3. 自分の興味や関心の幅が広がったと思う	2.1	8.5	17	36.2	36.2	3.96
4. 自分の能力を今よりもっと伸ばしたいと思うようになった	4.3	2.1	12.8	48.9	31.9	4.02
5. たとえ一人でも、自主的にボランティア活動ができるようになった	2.1	10.6	38.3	27.7	21.3	3.55
6. 自分がどのようなボランティアに向いているか、つかめてきたように思う	2.1	8.5	34	40.4	14.9	3.57
7. 社会の問題や課題に対する関心や意識が高まった	0	10.6	23.4	42.6	23.4	3.79
8. 社会の問題や課題に対して具体的な対策を考えるようになった	2.1	10.6	46.8	31.9	8.5	3.34
9. 社会の問題や課題に対して積極的に取り組みたいと考えるようになった	0	6.4	27.7	46.8	19.1	3.79
10. 社会の問題や課題に取り組むために、大学内外の人たちと、連携したり、コミュニケーションしたりするようになった	2.1	12.8	31.9	40.4	10.6	3.46
11. 大学で学ぶことに対して、より強い意欲を持つようになった	4.3	8.5	46.8	29.8	10.6	3.34
12. 大学で学んでいることとボランティア活動とを結びつけて考えるようになった	4.3	19.1	38.3	34	4.3	3.15
13. 大学でより専門的に学びたいと思う科目が増えた	0	25.5	38.3	27.7	8.5	3.19
14. 大学で勉強したことをボランティア活動に生かしてみたいと思うようになった	2.1	14.9	38.3	36.2	8.5	3.34
15. 職種や業種など、職業に関する理解が深まった	2.1	8.5	21.3	53.2	14.9	3.7
16. 卒業後の進路についての関心が高まった	2.1	8.5	31.9	48.9	8.5	3.53
17. 講義5回、活動7回（中間報告会、報告会を含む）の割合は適切であった	8.5	17	29.8	25.5	19.1	3.3
18. 学外からお招きした社会人講師による講義の回数（3回）は適切であった	4.3	17	25.5	31.9	21.3	3.49
19. 社会人講師の講義によって、ボランティアの内容や活動の仕方について理解を深めることができた	4.3	17	25.5	29.8	23.4	3.51
20. ボランティア活動期間の時期（11月から1月）は適切であった	10.6	10.6	25.5	40.4	12.8	3.34
21. ボランティア活動期間の時間数（30時間）は適切であった	10.6	21.3	29.8	25.5	12.8	3.09
22. 中間報告会の時期と方法は適切であった	10.6	21.3	27.7	27.7	12.8	3.11
23. 報告会の時期と方法は適切であった	6.4	23.4	23.4	27.7	19.1	3.3
24. 活動報告（記録）の書式（フォーマット）は適切なものであった	4.3	19.1	36.2	23.4	17	3.3
25. COCOMO についての情報提供は適切であった	10.6	25.5	27.7	21.3	12.8	3
26. COCOMO によるボランティア情報の提供は適切なものであった	8.5	17	40.4	17	17	3.17
27. 活動をブログに記載するという方法は適切であった	4.3	17	42.6	27.7	8.5	3.19
28. 担当教員からのボランティア活動についての情報提供は適切であった	0	17	27.7	42.6	12.8	3.51
29. 学外のボランティア団体との共同の企画や事前打ち合わせは有意義であった（参加者のみ回答）	6.4	17	34	21.3	6.4	3.05
30. 学外のボランティア団体との意見交換会などが行われるならば、参加してみたいと思う	4.3	19.1	40.4	31.9	4.3	3.13

*1 アンケートの教示は、「以下の項目はあなたにどの程度あてはまりますか。ボランティア論を履修する前と比較して、“よくあてはまる（5点）”から“全くあてはまらない（1点）”の5段階で教えてください」というものであった。

平野 (2001) によれば、「現在、ボランティア活動をしている」割合は7.2%であり、「以前にボランティア活動を経験したことがある」とあわせて、全体の約40%はボランティア活動の経験がある。一方で、「大学の講義が忙しいこと」、「情報の不足」、「活動に関する技術や知識のなさ」がボランティア活動の障害要因として挙げられている。

文部科学省の「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」中間報告 (2002) でも、ボランティア活動に興味・関心は持つ人が多い一方で、情報不足、技術力・知識不足、相談体制の未整備、時間的制約などの理由から、ボランティア活動等に参加することを思いとどまっている人が多いと述べ、興味・関心を持っている人に「もう一步を踏み出すきっかけ」や「もう一步を踏み出す後押し」となるような仕組みづくりの必要性に言及している。

このように、ボランティア活動に対する興味・関心は高いものの、知識不足や情報不足、時間やきっかけの不足などの理由で、ボランティア活動に参加できないと言うのが実情のようである。逆に言えば、これらの不足を補うことにより、これまで活動できなかった学生も「一步を踏み出す」ことができるようになるのだから、「ボランティア論」へのニーズは、知識不足や情報不足、時間やきっかけの不足を補うことであると言える。

正課の授業科目として「ボランティア論」を配置し、講義を通して「ボランティア活動の意義」、「地域の人々により具体的な取り組み事例」を紹介したり、インターネットのサイト (COCOMO) を利用してボランティア情報を数多く提供したりすることは、これらの不足を補い、ボランティア活動に積極的に参加するための「きっかけ」や「後押し」としての意味を持つであろう。

3 「ボランティア論」の目的に関する評価

「ボランティア論」はキャリア教育プログラムの中に位置づけられており、「現代社会のさまざまな課題に触れることを通して、視野を広げ、社会の一員であることを自覚するとともに、大学での勉強の目的を見つけること」を目的としている。

本学の正規科目であるから、このような目標を掲げるのは当然であろう。しかし、サービス・ラーニングの実習であるとは言え、学生が主体的に行うボランティア活動の目的を教育的な効果だけで捉えようとしたら、そのような目標を掲げたりするのは、ボランティア活動を矮小化し、活動するものの主体性を損なう危険がある。ボランティア活動とは、本来、自分自身の興味関心にしたがって、自発的に社会の問題に関わるものであるはずである。

このように「ボランティア論」の目的には、ボランティアの重要な概念である自発性をめぐる問題がないわけではない。しかし、ボランティア活動に興味や関心を持っていても、知識不足や情報不足、時間やきっかけがないなどの理由で、ボランティア活動に参加できない学生が多いという調査結果を踏まえると、大学が正規科目の中で、ボランティアやボランティア活動に関する知識や情報を提供し、活動のきっかけを与えることには、大きな意味があるだろう。そのような働きかけにより、多くの学生が現代社会の課題に触れ、視野を広げることになるからである。こ

これは大学が本来行うべき情報提供、知識提供の営みに他ならない。実際、授業評価アンケートの「たとえ一人でも、自主的にボランティア活動ができるようになった」（項目5）の平均は3.55、「自分がどのようなボランティアに向いているか、つかめてきたように思う」（項目6）の平均は3.57であり、受講生は「ボランティア論」を通して、ボランティア活動のきっかけをつかんだものと思われる。

さらに、地域で活動することを通して、学生は地域社会の一員としての自覚を高めることになるだろう。地域社会に主体的に関わり、社会をよりよく変えていこうとする姿勢を持つことは、現在の市民社会を支える基礎である。実際、授業評価アンケートでは、「社会の問題や課題に対する関心や意識が高まった」（項目7）と「社会の問題や課題に対して積極的に取り組みたいと考えるようになった」（項目9）の平均は、いずれも3.79と高いものであった。

地域での活動を通して直面した社会の問題を解決するためには、専門的な勉強が必要になる。それは、単位をとるためだけの試験勉強やレポート作成とは異なり、現実存在する課題の解決を目指したものである。したがって、地域での活動は大学での勉強の目的を見出す契機になると考えられるが、この点に関する授業評価アンケートの結果は必ずしも望ましいものではなかった。「大学で学ぶことに対して、より強い意欲を持つようになった」（項目11）の平均は3.34であり、「大学でより専門的に学びたいと思う科目が増えた」（項目13）では3.19であった。

これまでの議論や授業評価アンケートの結果から、受講生のニーズは、知識・情報・きっかけの提供にあること、ボランティア活動を通して、社会人としての意識の向上が図られることが認められたが、同時に、「ボランティア論」には自発性をめぐる問題も指摘された。このように相互に矛盾したいくつかの目的を抱えているのが「ボランティア論」の実態である。

しかし、その目的をボランティアに関する知識・情報・きっかけの提供に限定したり、すべてを学生の自発性に任せてしまったりするのでは、正規の科目として設置することの意味が見出せなくなる。ボランティアに関する情報やきっかけを提供し、社会人としての意識の向上を目指しながらも、学生の自発性や自由な発想、行動を包み込む包容力のある目標の設定が必要なのである。

この点について、シラバス等には書かれていないが、「ボランティア論」では、それが構想された当初から、学生のボランティア活動を媒介として、大学と地域との連携を図ることを目的の一つとして掲げていた。大学と地域がコミュニケーションを取りながら、役割を分担し、それぞれがボランティアに関する知識や情報、ボランティアのきっかけなどを提供し、同時に、学生の課題発見を支援したり、社会の一員としての自覚を持たせたりして、教育的に関わっていくことがもっとも望ましい姿であろうと思われる。

4 「ボランティア論」の方法に関する評価

本学「ボランティア論」は、サービス・ラーニングの教育方法を取り入れて実施された。サービス・ラーニングの教育方法は先に示したとおりである。その方法を十分に取り入れた部分もあったが、取り入れ方が不十分な部分も多かった。ここでは、「ボランティア論」における事前学習をめぐる問題、担当教員の積極的な関与と助言をめぐる問題について検討する。

まず、事前学習をめぐる問題について検討する。「ボランティア論」においては、学生に自らの研究課題を探索させ、それに関連する講義を受講させるような講義の形態を取ることはできなかった。サービス・ラーニングの理念は奉仕活動を通してそれを受ける側から、または活動自体から学ぶことであり、そのためには、事前の学習が欠かせない。「ボランティア論」においても、外部講師の講話など、活動に出かける前の学習活動が展開された。授業評価アンケートにおける「社会人講師の講義によって、ボランティアの内容や活動の仕方について理解を深めることができた」(項目19)の平均は3.51であり、受講生の評価も高かったが、サービス・ラーニングとしての「ボランティア論」をより深めるためには、学生の問題意識をより明確にし、より深めるような働きかけが必要であったろう。

しかし、3人の専任教員が担当するとは言え、学生の多様な問題意識に答え、それを深めるような働きかけをしていくことはたいへん難しい。しかも、受講生の多くが2年生であり、社会の問題に対する意識や関心はまだ浅い。外部講師の講話を通じてはじめて地域社会の問題に気づいた受講生も多かったものと思われる。ボランティア経験のない学生も多く、「ボランティア論」の受講をきっかけにボランティア活動に目覚めた学生も多い。

このような問題点を考慮すると、「ボランティア論」だけで本格的にサービス・ラーニングを展開することは現実的に困難である。今後は、専門演習との連携を模索し、専門演習の学習方法の一部として積極的にサービス・ラーニングを取り入れていくことを検討するべきであろうと思われる。

次に、担当教員による積極的な関与・助言をめぐる問題について検討する。「ボランティア論」においては、COCOMOシステムを利用して、学生のボランティア活動に対して、担当教員が随時コメントできるシステムを整え、それを実行した。この点は高く評価できるものと思われる。受講生には、活動の度に、活動日時、活動場所、活動内容や感想などをブログに投稿するように伝えた。担当教員には随時ブログに目を通し、投稿された学生の活動記録に対してコメントをつけるようお願いした。このような方法は、学生の活動意欲を高めるだけでなく、活動を通して発見したことを深める契機にもなるだろう。サービス・ラーニングのもっとも重要なポイントは、担当教員の積極的な関与と助言である。学生は担当教員の助言をもとに自らの活動内容と大学での勉強を結び付けていくからだ。担当教員が学生の活動に積極的にコメントを与えていく「ボランティア論」の方法を充実・発展させ、今後も維持していくことが望ましい。

ただし、受講生は必ずしもCOCOMOシステムを評価しているわけではなかった。授業評価ア

アンケートの結果、「COCOMOについての情報提供は適切であった」（項目25）の平均は3.0であった。また、「COCOMOによるボランティア情報の提供は適切なものであった」（項目26）の平均は3.17、「活動をブログに記載するという方法は適切であった」（項目27）の平均も3.19であり、必ずしも高いとは言えないものであった。

「ボランティア論」もCOCOMOシステムによる情報提供もはじめての試みだったこともあり、担当教員も学生も慣れていない部分があったことは否めない。今後はCOCOMOについて早い段階から情報を提供しながら、より使いやすいシステムを目指さなければならない。また、活動記録のブログへの記載についても工夫する必要がある。ブログの利点を活用して、受講生と担当教員が活発に情報交換することができるような工夫が必要である。

中間報告、最終報告の2回の報告会においても、担当教員の関与、助言により、学生が自らのボランティア活動を振り返る機会を提供したが、ボランティア活動の内容を大学での講義内容と連結させて総括するような総合的な関与・助言はできなかった。先に述べたように、学生の多様な活動を総括することの困難さに加え、時間的な制約も大きかったためである。実際、受講生の報告会に関する評価は必ずしも高いものではなく、たとえば、「中間報告会の時期と方法は適切であった」（項目22）の平均は3.11であり、「報告会の時期と方法は適切であった」（項目23）の平均は3.30であった。

ただし、この点については、講義後のレポートによって多少なりとも補うことができたものと思われる。レポートでは「実習の具体的な内容」、「実習を行う際の問題意識や期待」、「実習を通して考えたこと、発見したこと、反省点や改善点」、および、「発見を今後の学生生活にどのように生かすか」の4つの課題を提示したが、これらの問いかけに答えるためには、自らの活動内容を大学の勉学や将来の進路と結びつけて考えなければならない。レポートという課題の性格上、担当教員による積極的な関与、助言はできないが、これらの課題を通して、受講生への働きかけができたものと思われる。今後はレポート課題も含めて、担当教員の積極的な関与、助言の仕方を工夫し、サービス・ラーニングとしての「ボランティア論」の充実に努めなければならない。

5 「ボランティア論」の成果に関する評価

ここではまず、受講生の活動時間について検討する。「ボランティア論」では、30時間の実習を課したが、2006年2月末の期限までに30時間をクリアしたのは、受講生65人中、49人（75.38%）であった。学生数が1学年200人と言う小規模な大学で、その25%にあたる学生が地域でのボランティア活動に従事したことは高く評価されるだろう。一方で、受講生の25%は30時間に達しなかった。その内訳は、10時間未満の者が11人、10時間から20時間の者が4人、20時間から30時間の者が1人であった。

授業評価アンケートの「ボランティア活動期間の時間数（30時間）は適切であった」（項目21）に対する受講生の評価にはバラツキが大きかった（表2参照）。今後は、上記の結果を踏まえて、

実習30時間の意味を受講生に丁寧に説明する必要があるだろう。

次に、活動内容について見てみる。付表1に30時間の実習をクリアした履修生のボランティア活動の内容を示した。活動内容は延べ61種類と多岐にわたる。活動人数も延べ174人であった。上述のように、30時間をクリアした履修生は49人であったので、1人当たり1つ以上(1.24)のボランティア活動を行っていたことになる。

活動内容の分類は必ずしも容易ではないが、当日限りのいわゆるイベントの補助のような活動を行った者が多かった。NPOなどの団体に参加し、企画の段階から継続的にイベント作りに関わった学生や、専門ゼミでの勉強をボランティア活動に生かして活動を行った学生もいたが、その数は必ずしも多くなかったようである。このように、サービス・ラーニングに結びつくような活動を行った学生は必ずしも多くなかった。

本学において、本格的にサービス・ラーニングを展開するためには、この原因を分析する必要があるが、さまざまな活動を経験しながら、自分がどのような活動に向いているのかを探索していった学生も見受けられた。特に、ボランティア活動の経験が少ない学生にとっては、まず経験することが大事である。身近な活動を経験しながら、徐々に本格的なサービス・ラーニングを導入していくような段階的な展開が望ましいのかもしれない。

次に、授業評価アンケートの結果から、「ボランティア論」の成果について検討する。最初に述べたように、「ボランティア論」の目的は、①社会の課題に触れ、②視野を広げ、③社会の一員としての自覚を持ち、④大学での勉強の目的を見つけることである。

このうち、上記①から③に関連する項目について見てみると、「自分の興味や関心の幅が広がったと思う」(項目3)や「社会の問題や課題に対する関心や意識が高まった」(項目7)、「社会の問題や課題に対して積極的に取り組みたいと考えるようになった」(項目9)の3項目の平均は、それぞれ3.96、3.79、3.79であった。「ボランティア論」を受講することにより、受講生の興味関心の幅が広がり、社会の問題や課題に対して関心を持ち、積極的に取り組みたいと考えるようになったことは、大きな成果といえるだろう。

しかし、「社会の問題や課題に対して具体的な対策を考えるようになった」(項目8)、「社会の問題や課題に取り組むために、大学内外の人たちと、連携したり、コミュニケーションしたりするようになった」(項目10)の2項目の平均は3.34と3.46であり、あまり高いとは言えなかった。学生も徐々に慣れていくとは考えられるが、ボランティア活動への興味や関心の広がり、社会の問題に積極的に関与したいという動機付けを、具体的なコミュニケーションや行動につなげるための方策も必要であろう。

また、上記④の「大学での勉強の目的を見つける」について見てみると、「自分の能力を今よりもっと伸ばしたいと思うようになった」(項目4)の平均は4.02と高かったが、「大学で学ぶことに対して、より強い意欲を持つようになった」(項目11)、「大学でより専門的に学びたいと思う科目が増えた」(項目13)、の2項目の平均は、それぞれ3.34、3.19であり、必ずしも高いもの

ではなかった。このように、「ボランティア論」を受講したことが必ずしも、大学での学びに対する関心に結びついてはいなかった。

「大学で学んでいることとボランティア活動とを結びつけて考えるようになった」（項目12）、「大学で勉強したことをボランティア活動に活かしてみたいと思うようになった」（項目14）の平均も、3.15と3.34であり、サービス・ラーニングとしての展開が必ずしも十分ではないことを示している。

活動内容の一覧からもわかるように、多くの学生がイベント的な活動に従事し、大学での勉強を生かせるようなボランティア活動を行った者は少なかった。学生に対するボランティア活動の紹介方法の工夫や活動報告へのコメントを通じて、受講生が大学での学びとボランティア活動とを結びつけるように積極的に働きかけていく必要がある。

V まとめにかえて：「ボランティア論」の展開

最後に、これまでの評価検討の結果をまとめ、今後の「ボランティア論」の方向性を展望してみたい。

キャリア教育プログラムの一科目として2005年度から開講された「ボランティア論」の目的は「現代社会のさまざまな課題に触れることを通して、視野を広げ、社会の一員であることを自覚するとともに、大学での勉強の目的を見つけること」である。

この目的を達成するため、COCOMOシステムを導入して、ボランティア情報を提供したり、担当教員が適宜、積極的に、学生の活動に関与し、助言を与えたりするなど、サービス・ラーニングの教育理念と方法を取り入れてきた。

その結果、1学年の25%にあたる学生が地域でのボランティア活動に従事した。また、受講生は、ボランティア活動を通して、社会の問題や課題に対して関心を持ち、積極的に取り組みたいと考えるようになっていた。これらのことは、「ボランティア論」の成果といえるだろう。

しかし、サービス・ラーニングに結びつくような活動を行った学生は必ずしも多くなかった。また、「ボランティア論」の受講は、必ずしも、大学での学びに対する関心に結びついてはいなかった。「ボランティア論」においては、サービス・ラーニングとしての展開が十分ではなかったのである。

多くの学生がボランティア活動に興味・関心を持っているにも関わらず、ボランティア活動に対する知識不足や情報不足、時間やきっかけの不足などにより、積極的に活動できない現状がある。したがって、「ボランティア論」においても、ボランティアに関する情報やきっかけを提供することが必要である。同時に、キャリア教育プログラムの一科目として、社会人としての意識の向上を目指しながら、学生の自発性や自由な発想、行動を包み込む包容力のある目標の設定が必要である。また、その際、大学と地域がコミュニケーションを取りながら、役割を分担し、そ

れぞれがボランティアに関する知識や情報、きっかけなどを提供して、学生の課題発見を支援したり、社会の一員としての自覚を持たせたりするなど、教育的に関わっていくことが望ましい。

今後は、ボランティア活動への興味や関心の広がり、社会の問題に積極的に関与したいという動機付けを具体的なコミュニケーションや行動につなげるための具体的方策を検討しなければならない。また、学生に対するボランティア活動の紹介方法の工夫や活動報告へのコメントを通じて、受講生が大学での学びとボランティア活動とを結びつけるように積極的に働きかけていく必要がある。

ただし、「ボランティア論」だけで本格的にサービス・ラーニングを展開することは現実にはたいへん困難である。本格的なサービス・ラーニングの導入のためには、専門演習と連携し、専門演習の学習方法の一部として、その方法を取り入れることを検討するべきであろう。

一方、身近な活動を経験しながら、社会の課題に触れ、大学での勉強の目的を見つける機会も必要である。上記の問題点を改善しながら、キャリア教育プログラムとしての「ボランティア論」の位置づけは今後も継続されるべきであろう。

VI 引用文献

- 中央教育審議会 2002 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」(中間報告案)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/001/020302/020302a.htm#04 (2006年現在)
- 平野吉直 2001 学生のボランティア意識と大学 大学とボランティア スタッフのためのガイドブック 内外学生センター
- 水上徹男 2003 地域社会とボランティア活動—社会財の活用と互惠性の展開— 佐々木正道編
大学生とボランティアに関する実証的研究 第1章 ミネルバ書房
- ピーター・H・ロッシ、マーク・W・リップセイ、ハワード・H・フリーマン 2005 大島巖・平岡公一・森俊夫・元永拓郎(監訳) プログラム評価の理論と方法—システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド 日本評論社
- 佐々木正道 2001 アメリカ：サービスラーニングへの取組み 大学とボランティア スタッフのためのガイドブック 内外学生センター
- 辻利則・川瀬隆千・竹野茂・田中宏明 2005 CMSを用いた学生ボランティアマッチングシステムの構築 宮崎公立大学人文学部紀要 第13巻 第1号 183-193

付表1 履修生のボランティア活動の内容と人数

場所と内容	人数
西都原考古博物館での館内案内の補助	2
まちななかプレイパークでのコンサートの補助	1
宮崎地区交流センターでのイベント補助	1
公立大でのお茶会の補助	2
オルブライトホールでの音楽祭の補助	2
全国人権大会での会場補助	1
全国同和教育研究大会での会場補助	3
藤の木4丁目集会所(広島)でのクリスマス会の補助	1
桜ヶ丘集会所でのクリスマスコンサートの補助	1
講演会補助	1
市民ボランティア講座のスタッフ	4
小林市での成人式イベントの手伝い	1
「人にやさしい福祉の街づくり」(県総合福祉センター)に関する話し合いの補助	4
市民プラザでの街角体験塾	1
駅前商店街での祭りの補助	2
宮崎市民文化ホールでの会場設営	1
宮崎市総合福祉保健センターでの子育てネットワークinみやざきの補助	3
青島太平洋マラソンの給水補助等	23
公立大での障害者スポーツ大会補助	4
はんびドームでの障害者スポーツ大会補助	16
日向手をつなぐ育成会主催の知的障害者の交流会補助	1
橘通り等での植栽ボランティア	26
緑道公園でのごみ拾い	1
文化公園他でのごみ拾い	1
大淀川河川敷でのカウントダウン後のごみ拾い	1
地元の公民館の清掃	1
都城での地域の除草作業	1
アイリスケアセンターでの高齢者の話し相手	1
ホームホスピス宮崎での介護補助	2
子ども文化センターでのキッズカフェ	1
みやざき子ども文化センターのキッズルーム	1
大宮公民館での子どもDAYスタッフ	7
下小松での子どもDAYプロジェクトのイベントスタッフ	6
東地区交流センターでの子どもDAYスタッフ	4
子どもランドで子どもの世話	15
どろんこ保育園で子どもの世話	1
パソコン教室(凌雲会館)での託児	7
瓜生野児童クラブで子どもの世話	1
下富吉公民館で子どもの世話	1
宮崎市民プラザ「家庭教育を考えるつどい」で子どもの世話	1
下小松での台風14号による被災者救援ボランティア	1
太宰府市生涯学習センターでの事務スタッフ	1
アジア砒素ネットワーク事務所で会報送付の手伝い	1
高齢者パソコン教室でのアシスタント	4
アシスタント	1
地域総合型スポーツ教室で子どものスポーツの手伝い	1
公立大で小学生とテニス	1
国際空手道連盟極真会館宮崎支部神宮道場での空手指導	1
ECCのスタッフ宅で子どもに英語を教える	1
公立大での英語教室補助	1
科学技術館でのパソコン教室	1
公立大で通訳のボランティア	2
青島太平洋マラソンでの通訳	2
手話ボランティア	1
市民プラザでの観光ボランティア講座	1